

ブラウン
2本のアルトリコーダーのための
第2組曲

CDの演奏者

長谷川圭子（リコーダー）

石田誠司（リコーダー）

J. D. Braun
Suite No. 2
for 2 Alto Recorders

Players on CD

Recorder: Keiko Hasegawa

Recorder: Seiji Ishida

◆解説◆

前奏曲(プレリュード=Prélude)とそれに続く5つの曲から成っています。

—Prélude— 難易度 B2 —

この組曲全体を通じて、「シャープひとつ」の調号がついていますので、ファの音はナチュラル記号(\natural)がついていない限りは「ファ#」の音になります。このプレリュードはなだらかな動きで歌っていく曲で、音階の練習にも最適なので、通常はこの曲から練習を始めるとよいでしょう。(ただしこの曲は少し長いので、初級のかたは「コントルダンス」から始めるのをお勧めします。)

2小節目の Alto Recorder II (以下Rec. IIと略記) などに出てくる + の符号は「トリル」です。(「t.」を略記したのでしょうか。)トリルとは、「ひとつ上の音(つまり「ファのトリル」の場合ならソの音)」とすばやく何度か交替して演奏する意味ですが、この後の曲の場合も含め、最初は省いて練習してください(自分がトリルしなくても、相手方パートがしていれば、両方がトリルしている場合に近い演奏効果が上がります)。慣れたら少しずつこころみるとよいでしょう。

ここではファ(本当は「ファ#」ですが、今だけ便宜的に「ファ」で表します)にトリルがついていますから、「ファー」のかわりにすばやく「ソファソファー」ぐらいで演奏します。この間、もちろんタンギングはおこなわずに息を入れ続けます。

バロック時代の曲では、このようにトリルを「上の(高い方の)音」から開始するのが原則です。

Rec. Iの3小節目2拍目の小さいラの音符は「前打音」^{ぜんだ}です。ここではふつうの八分音符が書かれているのと同じ意味だと考えてよいでしょう。したがって、続く「ソ」の音は、表記上は四分音符ですが、実質は(半分の時間をラに与えるので)八分音符の長さになります。

7小節目に出てくる八分音符のトリルは、「下の音から始めて1回(1回半というべきか)」でも十分でしょう。たとえば、この小節のRec. Iならば、ドのトリルを「ドレドー」ですませるといことです。また、このRec. IIは「ラ」のトリルですが、これはラの指づかいで右手人指し指(4の指。指番号については巻末の運指表を参照してください)を開閉してください(シの音が通常より少し高くなるのですが)。

16小節のRec. IIには「ド#のトリル」があります。これは「ド#」の指づかい(012456)で4指を開閉するとよいでしょう。このとき、6に「スラッシュ」がついているのは、6を半分だけ開放しておく意味です。ただ、ド#の場合は、難しければ6を完全に閉じてしまっておいてもかまいません。半開放にする場合は、薬指を曲げたりするのではなく、少しだけ手首を回して、小指や薬指の先がふつうの時よりやや下向きかげんになるようにしてください。

Rec. IIの8小節目に「低いファ#」が出てきます。これはほとんどの指孔をふさいで右手小指だけを半開放にするという指づかいですが、やはり「手首を少し回す」要領でやってみてください。このような低い音の場合ほとくに、手指に力が入ってこわばると失敗しやすいので、「ふわりと軽く楽器を保持する」ように心がけましょう。

CDの演奏では最後に少しテンポを遅くしていっています。この曲に限らず、このようにして終わる方法は、よく行われます。

—Gracieusement— 難易度 B2 —

Gracieusementは「グラシューズマン」で、「優美に」という意味です。トリルなどの装飾を省けば難しくありません。そして、それでも十分美しいと思います。

Rec. Iの4小節目にシの二分音符にトリルがついています。こういう長めの音符をトリルする

ときには、「音の交替をだんだん速く」というのがスタイルです。

17小節には、二分音符に対して八分音符の後打音^{こうだ}、四分音符に対して十六分音符2つの後打音がつけられています。この曲の場合は、これらの後打音も、だいたいふつうの音符のときの音値を持たせてやればよさそうです。演奏例をよく聴いて、この感じをつかんでください。この装飾はちょっと難しい箇所です。挑戦する場合は、ゆっくりと何度も練習してください(さきほども申しましたように、最初はトリルや後打音を省いて演奏しても十分美しい曲です)。

1～16小節を繰り返した後、17～24小節も繰り返しますが、その1度目は24小節として1.の囲いがついた小節を演奏し、2度目にここまで来たときは、1.の小節をとばして2.の小節(これも小節番号は24小節です)に進みます。

さてRec. Iの26小節に「ミのトリル」が出てきます。「ファミファミファミ……」というトリルですが、この曲では「ファ」の音は原則として「ファ#」ですから、これはファ#とミの交替なのです。「ファ#」の音の替え指に「0」(つまり左手親指のみふさぐ)というのがありますので、これを用います。親指をふさいでおいて、人指し指を開閉することになります。

45小節からは八分音符二つずつのスラーがついています。二つの音を最初の一度のタンギングだけで、ひと息に演奏しますが、こういう場合は、2つの音の一体感を強調するために、各セットの後の方の音を短めにするのも面白いものです。

— Rigaudon — 難易度 B3 —

リゴドン^{リゴドン}は南フランスに起源を持つ舞曲で、速い2拍子または4拍子です。Cにタテ線が入っているのは「2分の2拍子」の意味で、白い玉の二分音符を「1拍」と感じる2拍子です。

生き生きした感じになるように、少し歯切れよく(つまり四分音符を短めに)演奏するとよいでしょう。

八分音符の動きが少し速いのですが、まずはゆっくりな方のマイナスインのテンポに合わせられるようになるまで、ゆっくりと練習を重ねてください。

— Menuet — 難易度 B2 —

メヌエットは比較的テンポの速い3拍子の舞曲です。これも少し歯切れよく(四分音符を短めに)演奏するとよいでしょう。

7小節のトリルはRec. I・Rec. IIともに指づかいに注意が必要です。Prélude, Gracieusementの解説を参照してください。

Rec. Iの9小節目に出てくるソのトリルは「ラソラソー」ぐらいで演奏します。いろいろな指づかいがありますが、「2345→245」を繰り返す指づかいが最もよく用いられます。

— Gigue — 難易度 B3 —

ジークは8分の6拍子または8分の12拍子の速い舞曲です。

3つでひとまとめ(一拍)になる八分音符のうち、最初の二つをスラーで結んであるのはジークによくある仕方で、これがジークのリズム感をつくり出します。

第1ジーク(1ere Gigue)のあと、第2ジーク(2e Gigue)に入り、また第1ジークに戻ります。ただし戻ったときは「繰り返し」を省きます。

第2ジークはbが二つの調号で、「ト短調」です。この調が少々厄介なのはRec. Iにたくさん出てくる「ミb」が前後関係によって難しい指づかいになるのがひとつの理由です。Rec. Iを練習

するときは、ゆっくりと慎重に練習して、慣れるようにしてください。また、両パートともに出てくる「低いソ」と「シb」の交替する動き（1小節目からもう出てきます）は、右手の中指と小指が逆の動きをする「クロスフィンガリング」になりますので、これもゆっくりと十分に練習してください。

なにしろこれが本組曲でもっとも難しい曲ですから、他の曲を練習してから、じっくり取り組んでください。

— Contredanse — 難易度 B1 —

コントルダンスはイギリスに起源を持つ速い2拍子の舞曲です。この曲も軽妙に演奏するため、四分音符は軽く短く演奏するとよいでしょう。少し速いですが、短くてシンプルですから、初級のかたは、まずこの曲から始めて、その後でプレリュードの練習に進んでください。

— 作曲者と作品について —

Jean Dniel Braun は、生没年もどのような人だったかもよくわかっていませんが、旋律楽器のためのデュエット、無伴奏ソロ曲、通奏低音つきソナタなど、いろいろな器楽曲を残しており、その中には、ややめずらしい低音楽器（ファゴットなど）のためのデュエットもあります。

本書に収録した曲集は、パリで1728年に出版されたもので、ミュゼット、ヴィエール、リコーダー、フルート、オーボエなどで演奏できる曲集と銘打たれています。

初級者でも演奏できるやさしい曲ばかりで構成され、しかもフランスバロックの香り高く、気品ある歌謡性とはなやかな装飾性を兼ね備えた、貴重な曲集です。バロック時代に、イタリアでは緩急の楽章を組み合わせた「ソナタ」が発達したのに対し、フランスではいろいろな宮廷舞曲をとり合わせた組曲が発達しました。この曲集も典型的なフランスふう組曲になっています。

— 曲の難易度表示について —

曲集や組曲の中の1曲ごと・ソナタの楽章ごとに、A1～C3の難易度表示を行いました。これはRJP独自の基準による「指回り難易度」の表示です。

A1 A2 B1 B2 B3 C1 C2 C3 の8段階があります。

A1 や A2 は「初級」というより「初心者」のレベル。B1～B2が初級、B3が中級、C1～C3が上級レベルというのが一応の目安です。しかし、C1以上が表示された速くてやや難しい曲の場合、付属CDに練習用の遅いテンポの伴奏も極力収録してありますから、中級者でも十分に取り組んでいただけます。そして、良い曲は非常に遅く演奏してもやはり楽しさがあるものです。「あまり遅いテンポではつまらないのでは」などと心配なさらず、ぜひ挑戦してみてください。